

自由人閑話（Ⅸ）

前鹿児島市医師会事務局長 馬原 文雄



サマーナイト花火

酉年生まれ「年男」の

「大いなる体験」・・・その後
昨年は6回目の「年男」という、人生において記念すべき年であった訳ですが、新年号（自由人閑話）で書かせていただいたように、三分の一は入院生活を余儀なくされるという、吾が人生72年において初めての「大いなる体験」となった一年でした。このような拙稿を読んでいただいた先生方には何かとご心配いただき、本当に申し訳ありませんでした。おかげさまで、今では普通に歩くことだけは何とかできるまでには回復してまいりま

した。

私は昨年8月にアキレス腱を手術してから退院まで、4カ月という通常の2倍の期間がかかってしまったのですが、それは、当初は順調に回復して10月の末には退院の予定だったところ、その直前に自分の油断から再断裂してしまっただけなのです。

術後8週間が過ぎ丁度9週目にはいったその日でした。最も再断裂の危険が高いと言われていた時期です。退院を前に、院内の温泉に入ったのですが、一瞬のはずみで反射的に治療中の左足に力が入ってしまったのです。ギ

ブスもない、装具もない無防備の状態で「しまった」と思ったときはもう遅かったのです。注意していたつもりでしたが、久しぶりの入浴でもあり、また退院が決まった気の緩みもあったのかもしれませんが。

担当の先生から「再断裂」の診断を受け、「あと2カ月は頑張らないといけませんね」と言われ、そのショックたるや・・・、後悔の念で身も心も打ちひしがれベッドに打っ伏してしまいました。そのような時でした。思いもかけず、担当の療法士お二人がベッド脇に來られて「一緒に頑張しましょう」と励ましてくれたのです。その有り難かったこと。そのことで「やってしまったことは仕方が無い、頑張るしかないんだ」と思い直すことができ

たのです。それから早速リハビリが始まりましたが、「頑張り過ぎないように」と言われるほど精一杯、でも楽しみながら続けることができました。

そして、退院できたのが酉年も押し詰まった12月末でしたが、その日担当の先生・看護師・リハビリ室のみなさんそれぞれに「よく頑張りましたね」と言っていたき、この歳にしてグッと胸が熱くなったことでした。

やっと正月は自宅で迎えられることとなりましたが、自宅とはいえまだ松葉杖と装具が必要で、特に朝晩の寝起き、お風呂、トイレには苦勞しました。このように不自由な自宅での生活ではありましたが、久しぶりの棲家です。どんな家でもやはり我が家はいいな—



と、ほっとした安心感がわきあがってきたものでした。そして週2日はリハビリのための通院を続け、同時に少しずつ散歩を始めたほうが良いということで、松葉杖と装具をつけた状態で家の周辺を歩くこととしました。

こうしてリハビリ計画が固まりましたが、毎日が地道な努力の積み重ねでした。最初のうちは、松葉杖・装具着用の姿で歩いていると、会う人ごとに「無理をしゃんなー」と声をかけられ、本当に有り難く元気をいただいたことでした。そのうち徐々に散歩の距離も長くなり、松葉杖がなくなり、そして3月にはついに装具が外れたのでした。

「普通に歩ける!」。この喜びを実感した瞬間でした。

そして4月からはリハビリ通院もしなくてよくなり(歩くことがリハビリ)、今では毎日7000歩を歩き、以前から日課としていた近くの運動公園まで坂を登っていくことができるまでに回復したのです。もちろん、カメラも無理をしない程度に再開することとしました。

6回目の酉年を迎えた男の、本当に「大いなる体験」でした。

いまこうして「大いなる体験」談を書くことができたのは、心のこもった治療をしていただいた先生・看護師・療法士の皆さんのお陰であり、それに心配していただいた多くの友人の皆さん、そして妻・家族の支えがあったればこそと感謝・感謝です。

日本政治の現状は

<「国権の最高機関」の形骸化を憂う>

自由人閑話も9話目となりますが、今回もまた政治の問題に触れざるを得なくなりました。いま、日本の政治は国民の意思とはかけ離れた危機的ともいえる状況に陥っているのではないかと思えるからです。

本稿を書いている最中に、通常国会の会期が延長されました。「カジノ法案」や「働き方改革法案」、それに突如提案されてきた参院の選挙制度を変える「公選法改正案」など、政府自民党にとって、いわゆる「重要法案」といわれている議案を成立させるためだと言うのです。世論調査によれば、これらの法案は問題が多く、いずれも国民の多くが反対もしくは急ぐ必要はないと答えているものばかりです。それなのにこれほど急ぐのは、来年は統一地方選挙や参議院議員選挙が予定されているから、国民の印象を悪くするようなことは早くやっておいたほうが良いという思惑があるからだと報道されています。反対の強い法案は強行採決してでも成立させるということでしょうか。これまでの国会運営も、「議論なき政治」と批判されてきたように、「数の力」を背景にして国会ではまともな議論はしない「採決ありき」の姿勢が際立っており、加えて、森友・加計問題では、行政府が立法府を騙すという前代未聞の事態になっているのです。このような状況を見せつけられると、国権の最高機関であるはずの国会の権威が失墜させられ、正に日本の政治は危機的状況にあると言っても過言ではないと思うのです。

自民党・公明党の与党の皆さんも「国権の最高機関」の一員のはずです。これでは、自らの首を絞めていることになっているとは考えないのでしょうか。「いや、それは分かっているが国民はすぐに忘れてくれるから」と高を括っているのでしょうか。

このような「採決ありき」の姿勢も、国会を軽視する姿勢も与党の「数の力」が背景にあるのは間違いありません。確かに、これだけの数を与えたのは国民です。選挙制度の問題はあったとしても、現実問題としてこれだけの数を与えてしまったのですから、責任は

国民・有権者にもあるのは当然です。だからこそ私たち国民には、主権者として、このような政治の現状を直視し、改めさせていく責任があるということを痛感するこの頃です。
＜森友・加計問題＝世の中のモラル破壊を誘導？＞

問題が発覚してからもう1年半も続く森友・加計問題ですが、依然として真相は明らかになっていません。世間では「もう、うんざりだ」「ほかにもやるべきことがたくさんある」などという声がある一方、国民の8割が「納得できない」と答えているのです。その根底には、安倍総理は果たして本当のことを言っているのだろうか、という率直な疑問があるからではないのでしょうか。国会には真相を解明する責任があります。

去る6月、財務省は森友学園との土地取引に関する決裁文書などの改ざん問題について調査結果を公表しましたが、その内容は到底国民を納得させられるものではありませんでした。改ざんのきっかけになったのが何なのか分からないままで、安倍総理夫妻への忖度の有無も調べていない、8億円値引きの経緯も明らかにしない、責任も佐川前理財局長以下一部官僚に押し付け政治家は誰も責任を取らない、といったものでした。第三者的な機関が調査したのではなく、財務省内部の身内の調査であったため甘いものになったのでしょう。この調査報告に対して野党はもとより、自民党内からも批判が出ているとのことですが、当然のことではないでしょうか。国民を代表する国会が、1年も行政府に騙し続けられてきたのですから国会はもっと怒るべきです。特に与党は、多数だからこそ、この問題をあいまいにすることは許されません。少なくとも、国会に特別委員会をつくるなどして解明を進める必要があると思うのです。

公文書の改ざん・廃棄、隠蔽、虚偽答弁、

セクハラ疑惑という前代未聞の「事件」に対して、安倍総理は口では「膿を出し切る」と言っていますが、どう見ても積極的ではないようです。そのうえ、財務省は改ざんを認めているのに検察は不起訴にしたのですから、なおさら国会の責任は大きいと思うのです。

森友問題の本質は、何故あのような不当な値引きが行われたのかを解明することであり、その中心にいるのが安倍昭恵夫人ではないかということ、国民誰もが感じていることではないでしょうか。それを、無理に「いっさい関わっていない」として本人にはしゃべらせないのでから……。加計問題も、安倍総理のお友達だからではなく、本当に公正に認可されたのかどうかという疑惑を解明することが必要なのに、安倍総理との関わりを示す文書がこれだけ沢山出てきても、無理やり「加計さんとは会っていない」「計画を知ったのは1月20日だ」などとおっしゃるから、周りがそれにあわせてウソを言っているのではないかとしか思えないのです。「いや、安倍さんは総理大臣だからウソを言うはずはない」のでしょうか？「ウソをついたとしても、これくらいのことは大したことない」のでしょうか？

いや、私にはそうは思えません。これは、我が国の戦後民主主義の根幹をひっくり返してしまうほどのことではないのか、このままでは、日本の社会のモラルが崩壊しかねないのではないかと心配するのです。現にいま、日大アメフト部問題をはじめ、多くの企業で発覚している改ざん問題など、ウソが蔓延しつつあるように思えるのです。これも森友・加計問題の影響ではないかと思うのは考えすぎでしょうか。

＜馴らされるのが怖い＞

安倍政権は、財務省の調査報告で幕引きを図りたい思惑のようですが、それを許すも許

さないも私たち国民世論にかかっているのはまちがいありません。

国会会期が1カ月も延長されたのですから、国会はこの際国民が望んでいない「重要法案」の採決ではなく、これらの真相解明をこそ行うべきだと思うのですが、延長国会の審議状況を見ると真相解明に後ろ向きな政府与党の強引さだけが目立つ、形式的な「採決国会」になってしまっているようで非常に残念です。国民が舐められているということでしょうか？このままでは、いずれ取り返しのつかないような大きな“つけ”を払わされることになりはしないか心配です。

最近「もう、うんざりだ」、「政治なんてこんなものさ」と思いがちになる自分にハッと

させられることがあります。これだけおかしなことが続くと良識も鈍麻させられてしまい、いつの間にか馴らされてしまう。これが一番怖いのです。国民の代表である国会が、これだけ行政府に愚弄されているのに、その国会では幕引きを図るかのようには与党の数の力だけの国会運営を見せ付けられているのです。

このようなことに馴らされてはいけません。

これは民主主義を守る上からも、国会の権威の上からも絶対にあいまいにしてはならないのではないかと。

私たち国民が本気で怒っていることを示すほかないのではないかと。

あらためて自分自身に問い直しているところです。

